

## 西洋文化史（7）

### 第一講 他者の歴史としての古代オリエント史

#### 授業前レポート

課題：「光はオリエントより」(Ex oriente lux,)の意味を説明しなさい。

#### 歴史学における他者性の存在

##### 名称の問題ーオリエントー

オリエント：東

何に対して東なのか？

西欧に対して東

西欧の中心性＝西欧中心主義

ギリシア・ローマ以来の伝統

「光はオリエントより」(古代ローマの格言)

**Ex oriente lux, ex occidente lex.**

(光はオリエントより、法は西方より)

意味の一つ：ローマは東方のギリシアから多くの文化を継承しているという意味。

さらにギリシアは東方のエジプトやメソポタミアなどから多くの文化的影響を受けている。

もう一つの意味：「光はオリエントより」(Ex oriente lux)に続く「法律は西方より」

( ex occidente lex) に注目。法と秩序は西方の起源だという。これは東方に対する西方の文化的優位を示すものとして理解できるのではないか。

地域、文化圏を指すのに「オリエント」という言葉は価値中立ではあり得ない。

古代ギリシア以来のヨーロッパの知的伝統の中で育まれてきた東方に対する西方の優位、東方世界の道徳的劣性という近代の「オリエンタリズム」と近代の中で形成されてきた「オリエント学」という学問体系と密接に結びついている。

#### 近代国民国家の枠組みの中での古代オリエント史

古代オリエント史を現代の国境線のフレームの中に押し込んでいないか？近代歴史学が18世紀末に形作られてきた「国民国家」という枠組みの中で研究を推し進めてきたことと同じ視点でメソポタミア史が今日のイラクという国を基盤とし、ペルシア史がイランという国の国境線を枠組みとし、エジプト史をエジプトという国家と重ね合わせて議論していないか？問題はそのような枠組みが有効なのかということにある。

ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）、『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、2007年。

#### 他者としてのオリエント

エドワード・W・サイード、『オリエンタリズム』上・下、平凡社、1993年。

残忍・傲慢・道徳観の欠如

柔弱・腐敗

市民的自立・自治の欠如

専制・隷属

停滞

#### 近代ヨーロッパ人のオリエント観

K・マルクス、『資本制生産に先行する諸形態』（草稿）

アジア的生産様式

共同体的土地所有

私的土地所有の欠如

大家族と個人の非独立

原始的共同態の残存

強靱な残存能力

低い生産性

停滞した社会

#### 近代史と共通した課題

近代の超克の必要

オリエンタリズム・国民国家・発展を核とする近代歴史学の超克